

夕顔以前の省筆

田村, 隆
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8928>

出版情報 : 語文研究. 97, pp.15-26, 2004-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



夕顔以前の省筆

一

書かれていない、という事態は文章の上にとどのような形で現れるのだろうか。それには二つ考えられる。一つは事柄自体が文章の俎上に一切載せられていないという形式である。『源氏物語』で言えは藤壺や六条御息所との出逢い、あるいは源氏の死を全く記さないとといった例がそれにあたる。そしてもう一つは事柄の存在は述べた上で「書かず」、「漏らし」と「書く」形式である。すなわち書かなかった痕跡をあえて遺すことである。後者の「省筆」は、冗漫を避けるという本来の「省く」効用と共に、語り手の視線をスムーズに挿入できるといった副次的効果も期待されるため、草子地の中でも

田村隆

「高度の技法と考えられる」^{注1}として、「省略の草子地」等の用語で従来言及されてきたレトリックである。例えば『源氏物語』には、

すきすきしきやうなれば、あたまひも明かさで、軒の霏も苦しさに、濡れく夜深く出で給ひぬ。ほととぎすなど必ずうち鳴きけむかし、うるさければこそ聞きもとめね。
(螢)

亡き人をしのぶるよひのむら雨にぬれてや来つる山ほととぎす

とて、いとゞ空をながめ給ふ。大将、

ほととぎす君につてなんふるさとの花たち花はいま

ぞ盛りと

女房など多く言ひ集めたれど、とゞめつ。(幻)

などが見られ、あるいは先行の物語でも、『落窪物語』に、

……との給ひて、もろ心にいそぎ給ふ。大将をいみじくかなしくし給ふ御心に入り給ふ事なればなりけり。十一月十一日になんし給ひける。こたみわが殿に皆引きつれて迎へ奉り給ひてなん。委しくはうるさければ書かず。例の人のたゞいとかめしう猛也ける。屏風の絵、ことぐもいと多かれど、書かず。(卷三)

もしくは、『つつほ物語』にも、

かくて、いぬ宮に餅参り給ふとて、女御の君折敷の洲浜を見給へば、……右大将、

む 姫松は乙子の限り数へつつ千歳の春は見つと知らな

とてさし出づれば、異人は見給はず。おとど、宮たち、宰相の中將、良中將、蔵人の少將、宮あこの大夫、皆、詠み給へれど、書かず。(蔵びらき下)

などの例が見られる。ただし、数としては『源氏物語』以前の省筆例は『源氏物語』に比して著しく少なく、それらの物語は「昔物語」の名でむしろその饒舌が指摘される。

着たまへるものどもをさへ言ひ立つるも、もの言ひさがないやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。(末摘花)

昔物語にも、物得させたるをかしきことには数へつゝけためれど、いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもは、えぞ数へあえはべらぬや。(若菜上)

などの如くである。省筆の手法は『源氏物語』に至つてはじめて豊かに用いられる。^(注)

二

さて、『源氏物語』における最初の省筆は、夕顔巻の次の例である。

(a) 惟光いさゝかの事も御心にたがはじと思に、をのれも限

なきすき心にて、いみじくたばかりまどひありきつゝ、
しひておはしまさせそめてけり。このほどの事くだく
しければ、例の漏らしつ。

色好みの隨身惟光は、源氏が夕顔へ通い初めるのを手引き
しようと様々に奔走するが、その具体的なるまいは一切記
されていない。「例の漏らしつ」のただ一言である。このよ
うな省筆が、物語の中に六十例近く見られる。それを一覽に
したものが次の表である。

野分	0	桐壺	0
行幸	1	帚木	0
藤袴	1	空蝉	0
真木柱	1	夕顔	4
梅枝	1	若紫	0
藤裏葉	1	未摘花	0
若菜上	5	紅葉賀	1
若菜下	2	花宴	0
柏木	0	葵	0
横苗	0	賢木	5
鈴虫	2	花散里	0
夕霧	2	須磨	5
御法	0	明石	3
幻	2	標	0
匂宮	0	蓬生	2
紅梅	0	閑屋	0
竹河	1	絵合	1
橋姫	0	松風	1
椎本	2	薄雲	1
総角	1	朝顔	1
早蕨	0	少女	3
宿木	4	玉鬘	0
東屋	0	初音	1
浮舟	0	胡蝶	1
蜻蛉	1	蛸	2
手習	0	常夏	0
夢浮橋	0	篝火	0

このデータから、例えば有名な巻ながらも、桐壺巻や若紫
巻には一例も見られないことなどが確認される。冒頭にも触
れたように、書かれていない事柄が多いということは、省筆
のレトリックの数に必ずしも関係しない。

また、物語の冒頭近くでは夕顔巻への偏りも見て取れる。
『明星抄』に「此筆法此巻のかぎざまとみえたり」とある通
りである。表からも明らかのように実際には以降の巻々にも
多く現れるので「此巻のかぎざま」とまでは言い難いけれど
も、桐壺・帚木・空蝉の三帖になく、この巻に突如四例現れ
るのは、たしかに集中・偏りを印象付ける。

そして、「例の漏らしつ」に傍点を付したが、初出におい
て「例によって書き漏らしてしまつた」とはいささか奇異な
謂いではある。先のいずれかの省筆を指すということである
うか。例えば、紫上への懸想文を「例の小さくて」と記す場
合（若紫巻）、前の文脈で小さく引き結んだ手紙のことが出
てくるのである。「例の」の指す内容が明示されている。
夕顔以前の三帖において唯一省筆らしい表現が見られるの
は、帚木巻の、

いと聞きにくき事多かり。

くらいであるが、これも実際に筆を省いたわけではなく、
「例の」が指す内実とは認め難い。

この問題について、石川雅望の『源註余滴』では、

六条御息所藤壺などすべて通ひそめ給へることをみなもらして下さるればこゝにも例のとは書たる也。

と述べ、冒頭に挙げた「事柄自体を書かない」例をもって、「例の」が指し示す内容とする。萩原広道もこの説を支持する。これに対しては島津久基氏が、

それから「例の漏らしつ」を余滴に、六条御息所・藤壺等すべて通ひ初めの事を漏らしてゐるのに応ずると述べてゐる。此の解は物語中の事実に照して矛盾は無いけれども、其処まで穿つて説くにも及ぶまいかと思ふ。

(『対訳源氏物語講話』)

と批判している。たしかに、「何も書かれていない」ことと、「書かないことが書かれている」ことを同一に考えるのは難しいのではなからうか。また、別の観点から玉上琢彌氏は、

これは作者のくせなのだ。『源氏物語』の作者のくせと
いうより、あるいは、広く物語のならわしなのかもしれ
ない。
(『源氏物語評釈』)

と推測する。しかし、先に述べたように先行の「昔物語」は冗漫こそ本領であり、省筆の例が極めて少ないという事情がある。「広く物語のならわし」とまではおそらく言えない。^(注)

『源氏物語』中から似た表現を探し出してみると、まずは、
例の、言足らぬ片はしは、まねぶもかたはらいたくてな
む。
(鈴木)

物語はすでに鈴虫巻に進んでおり、表の分布を考え合わせてもこの「例の」は理解できよう。次に、

うるさく何となきこと多かるやうなれば、例の、書き漏
らしたるなめり。
(椎本)

ここでも宇治十帖に入っており、問題はあるまい。これらも副詞的な用法として「例によつて」の如く解すべきものである。類する「例の」については、大木正義「『例の』をめぐつて」に用例が掲出されている。^(注)

例の残は止めつ。
(栄花物語 根あはせ)

その外は、くたくしければ、例のとゞめつ。

(増鏡 むら時雨)

などである。さらに、中世期の物語『しら露』にも、

この夜の作法、世にありわたることなりければ、例のし
るさず。
(巻下)

かうやつのだくだきことのみ、筆にも尽くしがたく
多かりけれど、ゆゑある何ぞの草子めきて、うち聞く耳
もかたはらいたければ、かつは、かたくなしき口にもま
かせて、多くはことそぎとどめにける。このほどのけし
き、思ひやるべし。
(巻上)

のような対応が見られる。巻上ですでにこれだけの長口上を
述べているのだ。しかし、夕顔巻のそれはあくまでも初出で
ある。とすれば、作者の紫式部が「例によつて」と言つとき、
その「夕顔以前」は玉上氏の言う先行物語の「ならわし」に
加え、自身がこの物語で用いる省筆自体をも指し示すと考え
てはどうかであるか。その際、玉鬘系後記説を考へるならば、
紫上系ですでに用いられた省筆も含むという意味で一層具体

化できよう。一つの試案として提出したい。

三

ところで、前節で見た夕顔巻の省筆は、初出であり、かつ
『明星抄』や萩原広道『源氏物語評釈』等において採り上げ
られたために、「くたくしければ、例の漏らしつ」という
パターンが省筆の基本型であるかの印象を受けがちだが、こ
の印象は物語全体を見渡した時にも持続するものであるか。
まずは、(a)に続く夕顔巻の例を見よつ。

(b) あな耳かしかましとこれにぞおぼさるゝ。何の響きとも
聞き入れ給はず、いとあやしうめざましき音なひとのみ
聞きたまふ。くたくしきことのみ多かり。

(c) 逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽
ちにけるかな

こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。

(d) 過ぎにしもけふ別るゝも二道に行くかた知らぬ秋の
暮かな

なをかく人知れぬことは苦しかりけり、とおぼし知りぬらんかし。かやうのくだくしき事は、あながちに隠るゝ忍び給しもいとをしきて、みな漏らしとゞめたるを……

先に見た初出例(a)を含め、これら四例(a)・(b)・(c)・(d)はすべて恋にまつわるものであり、それを「くだくし」、「うるさければ」として主観的に退けていることが確認される。省筆には、「いわば書き手のその場での個人的な気分といったたぐいのもの」と「省筆・省略の理由が我がままなものではなく、客観的にみてその理由なら省筆・省略もやむを得ないと判断される体のもの」の二種があることが大木氏によって指摘され、『源氏物語』には前者が多いことが述べられているが、以上の例を見るかぎりにおいては首肯できよう。だが、次にまとまって省筆が用いられる賢木巻ではやや様子が異なる。

(e) 殿上の若君たちなどうちつれて、とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なる方にうけぱりたるありさまなり。思ほし残すことなき御なからひに、聞こえかはし給事ども、まねびやらむ方なし。

(f) あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片はしだにかたはらいたし。

(g) 王命婦、

年くれて岩井の水もこほりとち見し人がげのあせも行かな

そのついでにいと多かれど、そのみ書き続くべき事は。

(h) くはしう言ひつゞげんにことくしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうのおりこそおかしき歌など出でくるやうもあれ、さうぐしや。

(i) 多かめりし事どもも、かうやうなるおりの、まほならぬ事数く書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫め、たつるゝ方にて、むつかしければ、とゞめつ。

これらの省筆は必ずしも主観的とは言えない。特に、(f)の例では桐壺院の遺言という重大事が、「女のまねぶべきことにしあらねば」として省かれる。また、(i)の例でも韻塞の負態での種々の詠歌が、「貫之が諫め」なるもつともらしい理由(「諫め」が具体的に何を指すのかは未だ明らかになされて

いないが) によって略されているのである。「冗漫を避ける省筆のレトリックが、一種の立場表明として利用されている。

これは、安和の変を記した『蜻蛉日記』安和二年三月条、

身の上をのみする日記には入るまじきことなれども、かなしとおもひいりしも誰ならねば、しるしをくなり。

といった記述に通底する精神である。今井源衛「政治と人間」には次のように述べられる。^(注7)

もともと、『源氏物語』について「政治」をいうことは、どこか気はすかしいところがある。というのは、例の物語が主として女性のためのものであったということに關わりがある。「女ノ御心ヲヤル物也」といわれたものに、どうして、まともな、その言葉に値する「政治」世界が描き出されよう。作者もいたるところで、女の身で公事についてそれ以上書くのは憚られる、などといった趣旨のことを述べているのである。そして、たしかに男の書いた『大鏡』やそのほかの歴史物などに比して、表現の主材料は公の蔭の私事の世界、男女の恋愛にほぼ的がしばられていることも間違いない。

このような叙述態度に基づく省筆こそ、むしろ物語における本来的省筆とも言えるのではなからうか。そして冒頭に見た前期物語の例も、男性作者が推定される点で性格が異なるとは言え、これに類する省筆であった。『落窪物語』の例は右大臣七十賀をめぐる省筆であったし、『うつほ物語』のそれは大宮の百日儀に關わっていた。ともに公的な事柄に關しての省筆である。後には『栄花物語』をはじめ歴史物語が好んでこの立場を強調することになる。

その日の儀式有様、女の記す事ならねば記さず。

(栄花物語 歌合)

御車の内思やられてめでたくいみじ。こまかには女などの心及ばぬ事にてとゞめつ。
(同 布引の滝)

物語文学の系譜として、われわれは、男の世界のことは書かれていない、という叙述態度を漠然と感じている。繰り返すが、このイメージは「書かれていない」という事実状況からのみ発生するのではない。時に「書かない」ことが「書かれて」いるからである。そのことによって、叙述の姿勢は一層確かなものになっている。

四

さらに須磨以降から三例を引用しよう。

- (j) さるべき所く、御文ばかりうち忍び給ひしにも、あはれとしのばるばかり尽くい給へるは、見所もありぬべかりしかど、そのおりの心ちのまぎれに、はかぐしうも聞きをかすなりにけり。
(須磨)

- (k) 「……聖のみかどの世にも、横さまの乱れ出で来る事、唐土にも侍ける。わが国にもさなむ侍。ましてことはりの齢どもの時いたりぬるを、おほし嘆くべき事にも侍らず」など、すべて多くのこともを聞こえ給。片はしまねぶもいとかたはらいたしや。
(薄雲)

- (l) おとゞの御はさらなり、親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙落として誦し騒ぎしかど、女のエ知らぬことまねぶはにくきことをと、うたてあれば漏らしつ。
(少女)

この(j)・(k)・(l)についても、源氏の須磨下向の「悲しみの

あまりに」(そのことが事件の重大さを物語る効果をもたらしている)、あるいは讓位についての冷泉帝と源氏の意見を「片はしまねぶも」云々、あるいは源氏たちの詠む漢詩について「女のエ知らぬこと」云々と、ことごとしく、かつ言い訳めいた表現を採っている。「源氏物語」内部の省筆もまた、一様ではないのである。

すなわち、「源氏物語」の省筆も、夕顔巻に見られるような、書き手が煩雑さを厭つての主観的な省筆と、女のまねぶべきことではないというポーズのもとに省略される省筆との二種に大別されるのではないが、多屋頼俊氏は「源氏物語わ主要人物に関しても必要の無い事惜しみなく省略している」との指摘をしているが、その省略の仕方自体にはやはり区別があつたと言つべきではないか。それは今述べたように、誰の(貴顕か否か)どういう事跡が(公的か私的か)どのような表現で(客観的か主観的か)省略されるかといった点を基準にしていたと思われる。その折に、一つの指標となるのが第二節で推定した「夕顔以前の省筆」ということなのである。すなわち、いわゆる「紫上系」の物語にこのような「ポーズ」の省筆は多い。

紫上系の物語においては特に國家に関わる政治向きの事や儀式の次第をことごとしい理由で省略し、その重大さ、盛大

さを間接的に高める効果をなす省筆が多い。これは前期物語の手法を受け継いだものと言える。中には「うるさければ」等の主観的な表現をとるものもあるが、その場合も大抵は公的な場面である。これに対して、玉鬘系の物語では、その類の省筆は少なく、ほとんどが男女のやりとりに関わるいわば私的な事柄の省筆なのである。行幸巻の例が例外的に冷泉帝と源氏の対話という公的な要素を帯びる程度に留まる。加えて、例えば体調の不例といった状況においてもその描かれ方は異なる。(j)では政治上の失脚から必然的に生じる悲しみを省筆の原因としていたが、次に掲げる蓬生巻、未摘花をめぐる話の顛末を記す例では、頭痛という理由でさも面倒そうに話が切り上げられる。

(m) かの大二の北の方上りておどろき思へるさま、侍従がうれしきものの、いましばし待ちきこえざりける心あささをはづかしう思へるほどなどを、いますこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさくものうければなむ。いままたもついであらむおりに、思出でて聞こゆべきとぞ。(蓬生)

語り手は所詮その程度の話題である、という姿勢をとって

いるのである。蓬生巻は玉鬘系の物語に属する。

五

一見無造作に綴られたように映る省筆は、実はその省く事柄、あるいは対象人物によって書き分けられていることがわかる。冗漫を避けるという基本的な装置の中に、記述を省かれない人と省かれる人の区別があるし(それはとりもなおさず「上の品」と「中の品」との区別と言えよう。高橋亨氏にも「源氏物語では、藤壺をはじめとする上の品の女性たちについてはあらわに描きにくいという表現のタブー意識が強く作用している」との指摘がある)、またその省かれる理由も、単に色恋沙汰の話を避ける場合と政治向きの話を忌避する場合とは、省筆の辞の重みに自ずと違いが現れている。

他の物語を見る限り、省筆の修辭法は物語が後半になるにつれ、数とそのバリエーションが豊富になるという傾向を示す。それは『つは物語』などに顕著である。しかしながら、『源氏物語』に関するかぎり、特に藤裏葉巻までの第一部において必ずしもそのような単調な動きは見せない。先の表が示す分布は、これら二つのタイプの省筆が混在している、そのことに由来するのではないか。また、物語が第二部へと進

むにつれ、省筆の在り方にも微妙な差異が生じてくる。一例を挙げれば、前掲の(1)は源氏たちが詠んだ漢詩を省略したものである。仮名文において、漢詩の紹介を省略することは『土佐日記』の、

唐詩かしょう 聲あげていひけり。和歌やまてうた あるじもまらうども、

こと人もいひあへり。唐詩はこれにえ書かず。

(「守の館にて、送別の宴」)

以来の常套であるが、

(n) その夜の歌ども、唐のも山とのも、心ばへ深うおもしろくのみなん。例の、言足らぬ片はしは、まねぐもかたはらいたくてなむ。
(鈴虫)

に見られる鈴虫巻の記述では、「新日本古典文学大系」の注に「(1)鈴虫巻では漢詩和歌ともに省略する」というのだから、女は口を出さないという逃げ口上と場合を異にする(藤井貞和氏)と指摘があるように、漢詩と和歌の両方が省略されている。これを(1)の「女のお知らぬことまねぐはにくきことをと、うたてあれば漏らしつ」と比べてみると、第一部では

「女のおまねぐこと」云々といった理由付けからゆるやかに解放されつつあると言えるのではないか。漢詩と和歌の省略は、続く宇治十帖の、

(o) 花盛りにて、四方の霞もながめやるほどの見所あるに、

唐のも大和のも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。
(椎本)

においても見出される。宇治での物語においては、そのほとんどが男女の消息に関わる省筆となる。蜻蛉巻冒頭の、

(p) かしこには、人々、おはせめを求めさはげどかひなし。物語の姫君の人に盗まれたらむあしたの様なれば、くはしくも言ひつゞけず。

といった例も、その移行を示唆する。女君たちとの恋の行方を略す際には、もはや初期のような改まった口上が述べ立てられることはなかった。ただ、「くだくしければ」、「うるさければ」でよかつたのである。^(注1)

片桐洋一氏は「うつほ物語」を、「つまり、凡ゆる物、凡ゆる事を描くのがこの物語の書き方なのである。書くべき物

と書くまじき物との区別が立たないのである」と評する
 (「うつつほ物語」の方法)⁽¹⁾ 主としてその写実態度について^(注)。
 (二)では、『源氏物語』は何を「書くべき物」、「書くまじき物」と設定しているのであろうか。まずは「女のまねぶべきことにしあらねば」として「大事なことは書かない」という立場を貫こうとする。それが「書くまじき物」の第一である。大事なことは無論、国家の問題に関わるような政治向きの話題である。だが、これまでの考察で見た通り、一方で時として「大事でないこと」をも書くまいとすることがある。恋の顛末を省略するような場合である。その根底にあるのは、「漏らしてはならないはずの貴顕の出来事と、漏らしてもよい世界の出来事」という構図であらう。つまりは、大事なことも大事でないことも書かないのである。これは逆説的な謂いであるが、すなわち政治上の事を忌避すること、女君との恋を省くことの両者を巧みに織り交ぜながら物語は進んでゆく。ただ、一度にどちらも省略するということは出来ないで、必要とされる立場に応じて主観的・客観的な省筆を使い分けるのである。その変奏の指標となるのがいわゆる紫上系物語・玉鬘系物語ということになるのではなからうか。第一節で述べた省筆の「豊かさ」には数だけでなく、そのような質的な成熟があることも見逃せない。省筆 すな

わち書いたり書かなかったりする自由 は、それが存在するだけですでに私的な性格を語っているが、その枠組の中にもまた、公・私両面の働きが伏在することが『源氏物語』において確認されるのである。

注

注1 中野恵一「うつつほ物語」の草子地」、『宇津保物語論集』 古典文庫、昭和四十八年。

注2 拙稿「省筆論 源氏物語の叙法」、『文学』 平成十五年十一月。

注3 小沢恵右「紫式部の物語の方法 省略の方法について」(『国語教育研究』 十八、昭和四十七年一月) に用例が掲げられている。ただし、省筆であるとの判断について、本稿は多少基準を異にする。

注4 さらに、高橋亨「夕顔の巻の表現 テクスト・語り・構造」『文学』(昭和五十七年十一月) は、話の類型を求める立場から次のように述べる。

主従の恋の組みあわせは、他に類型があつたかもしれないが、『落窪物語』の引用とみてよい。惟光が光源氏の乳母子であることは、『落窪物語』の少将道頼と帯刀との関係と同じだし、惟光と帯刀の惟成という名も、偶然の類似ではあるまい。ほんらいなら、歌の贈答を含んで描かれるべき通いはじめの経路を、先行作品の類型的発想にまかせて省略したのである。

省筆の理由として具体的に『落窪物語』の存在を掲げている

点で示唆に富む。

注5 『歴史物語文章論 今鏡を中心に』 教育出版センター、平成四年。氏も先行する文脈に省筆の例を求める立場を採る。

注6 「省筆・省略の理由づけの表現をめぐって」、「詩歌の省筆・省略をめぐって」『歴史物語文章論 今鏡を中心に』 教育出版センター、平成四年。

注7 『今井源衛著作集第二巻 源氏物語登場人物論（笠間書院、平成十六年一月）』所収。初出は『国文学』昭和四十六年六月。

注8 『源氏物語の思想』法蔵館、昭和二十七年。

注9 注4。

注10 注1。

注11 後期物語では、

人心地おぼえず、むくつけくおそろしきに、ものもおぼえず。奥の方より和琴の人の声にや、「御とのごもれ。御格子も、ふけぬらん、人く参り給へや」といひて、いざり入るに、かゝれば、いはむかたなく、思ひまどふなども世のつねなりや。くだくしければとゞめつ。（『夜の寢覚』巻一）
に見られる如く、夕顔巻の手法を思わせる省筆が多い。

注12 『源氏物語以前』笠間書院、平成十三年。

注13 注2。

（付記）

本稿は第五十三回西日本国語国文学会（於宮崎女子短期大学、平成十五年九月二十一日）における口頭発表の原稿を基に加筆したものである。席上、種々の御示教を賜った宮崎大学の山田利博先生に心より御礼申し上げます。

（たむら たかし・本学大学院博士後期課程）